岩屋病院（旧豊橋脳病院）見学記

宇都宮みのり

去る2014年１月11日(土)、社会福祉学科４年の学生２名を含め橋本明教授他、計６名で、愛知県豊橋市にある岩屋病院に見学に行った。見学の目的は、解体が決定している岩屋病院内の古い木造の旧病棟および旧保護室を記録することである。案内は、同病院勤務の西本彩香氏（宇都宮の教え子：PSW）および同病院勤務の矢岳氏（修繕・保全）である。西本氏から「古い病棟が解体される」という事前情報を得、解体直前に小林朝隆院長から許可をいただき見学会を実施した。記憶が新しいうちに見学で得た情報をここにメモしておきたい。

岩屋病院は、小林辰男によって、1934(昭和９)年に、豊橋市東部、愛知県と静岡県の県境に近い岩屋観音山麓（豊橋市岩屋町岩屋観音下、現在の豊橋市岩屋町岩屋下１－２）に、木造平屋建て３病棟（35床）の「豊橋脳病院」として開設される（岩屋病院設立経緯は橋本明教授のホームページを参照のこと：橋本明「近現代日本精神医療史研究会」ホームページより「豊橋脳病院（岩屋病院）とその後：『愛知県精神病院史』その15〈新シリーズ・小林靖彦資料92〉」http://kenkyukaiblog.jugem.jp/?eid=400最終アクセス日2014年２月９日)。1938（昭和13）年には愛知県精神代用精神病院（病床数171床）として厚生省の指定を受け、1943（昭和18）年に「岩屋病院」と改名する。その後病棟を増改築し、1972(昭和47)年の580床をピークに、現在は412床、措置入院（10床）の指定病院として指定（岩屋病院ホームページ「病院の沿革」より。最終アクセス日2014年２月９日）された、東三河地区の拠点病院である。

「古い病棟」の建設年は院長先生においてもわからないとのことだった。院長先生の記憶では、「おそらく戦後に建設。現在の主任たちが若い頃まで職員寮として20年ほど使われており、患者さん用の病棟として機能していたのはその前のこと」とのことである。とすると病棟としての機能は1960–70年代くらいまでだろうか。「床が抜けているので足元に気をつけて」と院長先生から声をかけられ見学に向かう。

職員から「作業棟」と呼ばれるこの建物は細長い造りで、中央の長い廊下をはさんで両側に部屋がある（図１参照)。まずは「営繕倉庫」「本管預り品」等と書かれた部屋がある。室内には廃棄を待つ物品が積まれている。建物中央に便所がある。便所は建物からせり出す形で存在し、大便器２つと男性用小便器１つが残る。便所の高い位置に横に細長い窓があるおかげで内部は明るい。便所の窓には1.5cm程の細かい鉄網が張ってある。

便所の隣に12畳の部屋が位置づく。この部屋にだけ二間続きの大きな押入れと洗面台があり、さらに照明の集中スイッチが設置してあることから、職員詰所だったのではないかと思われる。この詰所から奥に向かって８畳と12畳の部屋が８つ続いている（写真１)。各病室には床から約60cmの位置から約120cmの高さの大きな腰窓が壁面全体にある。木製の窓枠に擦りガラスと透明ガラスがはめられ、ガラスの内側に約10cm幅の縦の鉄柵が取り付けられている（写真２)。窓が大きいためか鉄柵があっても圧迫感はなく、室内は自然光で十分な明るさを保つ。

矢岳氏によると、この建物はもともと小学校の校舎として使われていたものを移築して使用したものらしい。建物そのものは戦前のものだろうと

写真６　かつての保護室の室内から廊下を見る

写真５　かつての保健室（撮影：橋本明氏）

写真２　壁全面にある窓のおかげで室内は明るい。（手前の人物が西本氏）

写真１　手前は倉庫、その奥に病室、突き当りに保護室の小窓が見える。

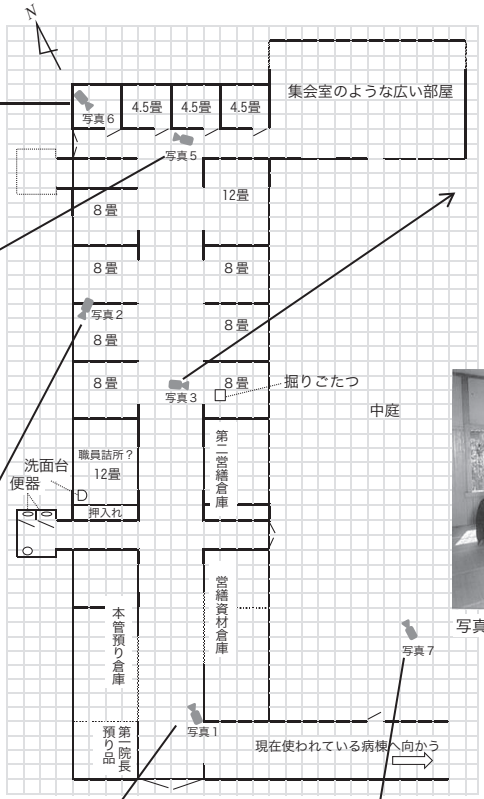

写真３　掘りごたつと思われる跡

写真４　代用精神病院と指定されたころの写真（出典：近代日本精神医療史研究会 HP http://kenkyukaiblog.jugem.jp/?eid=400 より。最終アクセス日 2014 年２月９日）

写真７　「作業棟」の外観。右の写真のような光景がこの中庭でもあっただろうか。

写真８　代用精神病院と指定されたころの写真（出典：同上）

図１　「作業棟」概略図

注：見学時の宇都宮メモによる再現

のことである。床は、敷居から 2 cm ほど低くなっている。部屋が畳敷きだったか板張りか不明だが、１室に６人ほどが療養していたのではないかと教えてもらった。

病室と思われる部屋に戸はない。倉庫には戸がある。もともとあった戸を解体に向けて事前に撤去したのか、もともとなかったのかは不明である。病室の１つには掘りごたつ(？)の跡があり（写真３）、棚の奥には囲碁セットが埃をかぶって残されている。代用精神病院に指定された頃の写真に病室で囲碁に興じる患者さんたちが写しだされている（写真４）が、そんなのんびりとしたかつての患者さんの療養生活が思い浮かぶ。

廊下の突当たりに4.5畳の部屋が４つ並ぶ。かつて保護室として使用されていたそうで、金属製の扉に閂鍵が上下に２つ取り付けられている（写

真５）。天井は外に向かうほど斜めに高くなる。外壁の天井近くの高い位置に小窓がある。また入口扉の横の低い位置にも小窓がある。高い窓にはガラスが入っておりその内側に約10cmの鉄柵がある。低い窓には内側に鉄柵、その外側に金網が張ってあり、ガラスは入っていない。窓の位置やガラスは自傷行為を避けるための配慮であろう。保護室の中に入ると、廊下の人の声は小さくしか聞こえない。静かで、不思議と落ち着く空間であった（写真６）。

そして最後に外観をみる。代用病院に指定された時の中庭の患者さんの様子を写す写真と見比べながら（写真７・８）、かつての患者さんはこの場所でどんな時間を過ごしたのだろうかと学生たちと話し合った。

この「作業棟」の他、1961（昭和36）年に建設された「東病棟」も解体中であった。同様に見学させていただいたが、今回は紙面の都合で紹介できなかった。歴史を語る文化財がまた一つ消えたことを残念に思いながらも、貴重な建物をここまで残してくださっていたこと、今回見学を許可していただいた小林朝隆院長に深謝する。

尚、この文章は西本氏・矢岳氏の確認後、2014年２月13日に小林朝隆院長の承認を得て掲載するものである。